

傳道之書

第一章

一 ダビデの子 エルサレムの王 傳道者の言

二 傳道者言く 空の空 空の空なる哉 都て空なり

三 その身に何の益かあらん 世は去り世は來る 地は永久に長存なり

四 ぎゆくなり 風は南に行き又轉りて北にむかひ 旋轉に旋りて行き 風復その旋轉る處にかへる

五 風に南に行き又轉りて北にむかひ 旋轉に旋りて行き 風復その旋轉る處にかへる 萬の物は勞苦す 人これを言つくす

六 後になる 日は見に飽ことなく 耳は聞に充ること無し 曩に有し者はまた後にあるべし 曩に成し事はまた

七 後になる 日は見に飽ことなく 耳は聞に充ること無し 曩に有し者はまた後にあるべし 曩に成し事はまた

八 後になる 日は見に飽ことなく 耳は聞に充ること無し 曩に有し者はまた後にあるべし 曩に成し事はまた

九 後になる 日は見に飽ことなく 耳は聞に充ること無し 曩に有し者はまた後にあるべし 曩に成し事はまた

一〇 後になる 日は見に飽ことなく 耳は聞に充ること無し 曩に有し者はまた後にあるべし 曩に成し事はまた

一一 後になる 日は見に飽ことなく 耳は聞に充ること無し 曩に有し者はまた後にあるべし 曩に成し事はまた

一二 後になる 日は見に飽ことなく 耳は聞に充ること無し 曩に有し者はまた後にあるべし 曩に成し事はまた

一三 後になる 日は見に飽ことなく 耳は聞に充ること無し 曩に有し者はまた後にあるべし 曩に成し事はまた

一四 後になる 日は見に飽ことなく 耳は聞に充ること無し 曩に有し者はまた後にあるべし 曩に成し事はまた

一五 後になる 日は見に飽ことなく 耳は聞に充ること無し 曩に有し者はまた後にあるべし 曩に成し事はまた

一六 後になる 日は見に飽ことなく 耳は聞に充ること無し 曩に有し者はまた後にあるべし 曩に成し事はまた

イ傳一・一二、七・二 九、一四四・四 傳 二傳二・二二、三・九 へ詩一九・五、六 一〇四・八、九 二二三 傳二・九
七、一二・八一・一〇 一二・八 水詩一〇四・五、二 卜約三・八 一〇 傳三・一九 傳三・ 七 傳二・三、二二、七、
口詩三九・五、六、六二 八編八・二〇 九、九〇 九、九〇 詩 又傳三・一五 一〇 傳三・一九 傳三・ 七 傳二・三、二二、七、
四・三〇、一〇・七、 二二三、二五 撒前五

夕傳二二・二二
 レ路二二・一九
 ソ寮五〇・二一
 ツ鏡二四・二三 傳七 ナ王上九・二八、一〇 ム傳三・二二、五・一 半傳一・二七、七二五
 六・六
 二〇、一四、二二
 八、九、九
 ネ傳一・二七
 ラ傳一・二六
 ウ傳一・三、一四

一八 とし狂妄と愚癡を知んとしたりしが 是も亦風を捕ふるがごとくなるを曉れり 一八
 夫智慧多ければ憤激多し
 知識を増す者は憂患を増す

第二章

一 我わが心に言けらく 來れ我試みに汝をよろこばせんとす 汝逸樂をきはめよと 嗚呼是もまた空
 なりき 我笑を論ふ是は狂なり 快樂を論ふ是何の爲とところあらんやと 我心に智慧を懷きて

居つゝ酒をもて肉身を肥さんと試みたり 又世の人は天が下において生涯如何なる事をなさば善らんかを知んた
 めに我は愚なる事を行ふことをせり 我は大なる事業をなせり 我はわが爲に家を建て葡萄園を設け 園を

つくり園をつくり 又菓のなる諸の樹を其處に植ゑ 又また水の塘池をつくりて樹木の生茂れる林に其より水を

灌がしめたり 我は僕婢を買得たり また家の子あり 我はまた凡て我より前にエルサレムにをりし者よりも

衆多の牛羊を有り 我は金銀を積み 王等と國々の財寶を積あげたり また歌詠之男女を得 世の人の樂なる

妻妾を多くえたり 斯我は大なる者となり 我より前にエルサレムにをりし諸の人よりも大になりぬ 吾智慧も

一〇 またわが身を離れざりき 凡そわが目の好む者は我これを禁ぜず 凡そわが心の悦ぶ者は我これを禁ぜざりき

二 即ち我はわが諸の勞苦によりて快樂を得たり 是は我が諸の勞苦によりて得たるところの分なり 我わが手

にて爲たる諸の事業および我が勞して事を爲たる勞苦を顧みるに 皆空にして風を捕ふるが如くなりき 日の下

には益となる者あらざるなり

三 我また身を轉らして智慧と狂妄と愚癡とを觀たり 抑王に嗣ぐところの人は如何なる事を爲うるや その

既になせしところの事に過ぎるべし 光明の黑暗にまさるがごとく智慧は愚癡に勝るなり 我これを曉れり

一四 智者の目はその頭にあり愚者は黑暗に歩む然ど我し其のみな遇ふところの事は同一なり 我心に謂けらく

一五 愚者の遇ふところの事に我もまた遇ふべければ我なんぞ智慧のまさる所あらんや 我また心に謂り是も亦空なる

一六 のみと 夫智者も愚者と均しく永く世に記念らるゝことなし來らん世にいたれば皆早く既に忘らるゝなり

一七 嗚呼智者の愚者とおなじく死るは是如何なる事ぞや 是に於て我世にながらふることを厭へり凡そ日の下に

爲ところの事は我に悪く見ればなり 即ち皆空にして風を捕ふるがごとし

一八 我は日の下にわが勞して 諸の動作をなしたるを恨む其は我の後を嗣ぐ人にこれを遺さざるを得ざれば

一九 なり 其人の智愚は誰かこれを知らん然るにその人は日の下に我が勞して爲し智慧をこめて爲たる 諸の工作

二〇 を管理るにいたらん是また空なり 我身をめぐらし日の下にわが勞して爲たる 諸の動作のために望を失へり

二一 今茲に人あり智慧と知識と才能をもて勞して事をなさんに終には之がために勞せざる人に一切を遺してその

二二 所有となさしめざるを得ざるなり 是また空にして大に悪し 夫人はその日の下に勞して爲ところの 諸の動作

二三 とその心 勞によりて何の得ところ有るや 其の世にある日には常に憂患ありその勞苦は苦しその心は夜の

二四 間も安んずることあらず 是また空なり 人の食飲をなしその勞苦によりて心を樂しましむるは幸福なる事にあらず 是もまた神の手より出るなり

二五 我これを見る 誰かその食ふところその歡樂を極むるところに於て我にまさる者あらん 神はその心に適ふ

二六 人には智慧と知識と喜樂を賜ふ 然れども罪を犯す人には勞苦を賜ひて斂めかつ積ことを爲さしむ 是は其を神の

心に適ふ人に與へたまはんためなり 是もまた空にして風を捕ふるがごとし

イ 箴一七・二四 傳八 二二・三・一一 木伯五・七、一四・一 二二・三・一一、一三、ト伯二七・二六、一七、
ハ 詩四九・一〇 傳九 二傳一・三、三・九 二二、五・一八、八 箴二八・八
ロ 詩四九・一〇 傳九 二傳一・三、三・九 二二、五・一八、八 箴二八・八

一六
 一七
 一八
 一九
 二〇
 二一
 二二
 二三
 二四
 二五
 二六
 二七
 二八
 二九
 三〇
 三一
 三二
 三三
 三四
 三五
 三六
 三七
 三八
 三九
 四〇
 四一
 四二
 四三
 四四
 四五
 四六
 四七
 四八
 四九
 五〇
 五一
 五二
 五三
 五四
 五五
 五六
 五七
 五八
 五九
 六〇
 六一
 六二
 六三
 六四
 六五
 六六
 六七
 六八
 六九
 七〇
 七一
 七二
 七三
 七四
 七五
 七六
 七七
 七八
 七九
 八〇
 八一
 八二
 八三
 八四
 八五
 八六
 八七
 八八
 八九
 九〇
 九一
 九二
 九三
 九四
 九五
 九六
 九七
 九八
 九九
 一〇〇

第三章

一 天が下の萬の事には期あり 萬の事務には時あり 生るゝに時あり 死るに時あり 植るに時あり
 二 植たる者を抜に時あり 殺すに時あり 醫すに時あり 毀つに時あり 建るに時あり 泣に時あり
 三 笑ふに時あり 悲むに時あり 躍るに時あり 石を擲つに時あり 石を斂むるに時あり 懐くことをせ
 四 ざるに時あり 得に時あり 失ふに時あり 保つに時あり 棄るに時あり 裂に時あり 縫に時あり 黙すに時あり
 五 語るに時あり 愛しむに時あり 惡むに時あり 戰ふに時あり 和ぐに時あり 働く者はその勞して爲ところより
 六 して何の益を得んや 我神が世の人にさづけて身をこれに勞せしめたまふところの事件を視たり 神の爲し
 七 たまふところは皆その時に適ひて美麗しかり 神はまた人の心に永遠をおもふの思念を賦けたまへり 然ば人は神
 八 のなしたまふ作爲を始より終まで知明むることを得ざるなり 我知る人の中にはその世にある時に快樂をなし
 九 善をおこなふより外に善事はあらず また人はみな食飲をなしその勞苦によりて逸樂を得べきなり 是すなはち
 一〇 神の賜物たり 我知る凡て神のなしたまふ事は限なく存せん 是は加ふべき所なく是は減すべきところ無し 神
 一一 の之をなしたまふは人をしてその前に畏れしめんがためなり 昔ありたる者は今もあり 後にあらん者は既に
 一二 ありし者なり 神はその逐やられし者を求めたまふ
 一三 我また日の下を見るに審判をおこなふ所に邪曲なる事あり 公義を行ふところに邪曲なる事あり 我すな
 一四 はち心に謂けらく神は義者と惡者とを鞠きたまはん 彼處においては萬の事と萬の所爲に時あるなり 我また
 一五 心に謂けらく是事あるは是世の人のためなり 即ち神は斯世の人を檢して之にその獸のごとくなることを自ら曉
 一六 らしめ給ふなり 世の人に臨むところの事はまた獸にも臨むこの二者に臨むところの事は同一にして是も死ば

〇 彼も死るなり 皆同一の呼吸に依れり 人は獸にまさる所なし皆空なり 皆一の所に往く 皆塵より出で皆塵に

三三 かへるなり 誰か人の魂の上に昇り獸の魂の地にくだることを知ん 然ば人はその動作によりて逸樂をなす

三二 には如はなし 是の分なればなり 我これを見る その身の後の事は誰かこれを携へゆきて見さしむる者あらんや

一 茲に我身を轉して日の下に行はる 諸の虐遇を視たり 嗚呼虐げらる 者の涙ながる 之を慰む

第四章

二 生る生者よりも既に死たる死者をもて幸なりとす 又一人よりも幸なるは未だ世にあらずして日の下に

三 おこなはる 惡事を見ざる者なり 我また 諸の勞苦と 諸の工事の精巧とを觀るに 是は人のたがひに嫉みあひて成せる者たるなり 是も空

四 にして風を捕ふるが如し 愚なる者は手を束ねてその身の肉を食ふ 片手に物を盈て平穩にあるは 兩手に

四五 物を盈て勞苦て風を捕ふるに愈れり 我また身をめぐらし日の下に空なる事のあるを見たり 茲に人あり只獨にして伴侶もなく子もなく兄弟

八七 もなし 然るにその勞苦は都て 窮なくその目は富に飽ことなし 彼また言ず嗚呼我は誰がために勞するや何とて

九 我は心を樂ませざるやと 是もまた空にして 勞力の苦き者なり 二人は一人に愈る其はその勞苦のために善報を

〇 得ればなり 即ちその跌倒る時には一箇の人その伴侶を扶けおこすべし 然ど孤身にして跌倒る者は憐なるかな

二二 之を扶けおこす者なきなり 又二人ともに寢れば温煖なり 一人ならば争で温煖ならんや 人もしその一人を

三三 攻撃ば二人してこれに當るべし 三根の繩は容易く斷ざるなり

イ創三・一九 一・二五・一八・一一 ホ傳六・二二、八・七、ト伯三・二七 一六・八
ロ傳二・二七 九 一〇・一四 一六・一六、三三 二七・二〇 約壹
ハ傳二・二四、三・二傳二・一〇 へ傳三・二六、五・八 二二 傳六・三 又傳一五・一六、一七、二二・一六 二・一六
ヲ詩三九・六

ワ出三・五卷一・二二 八、二一・二七 何 七
カ母前一五・二二 詩 六・六
五〇・八 俄二五・三 俄一〇・一九 太六
レ民三〇・二 申二三 ソ詩六六・二三、一四 木傳二二・一三
二二一・二三 詩五 ツ俄二〇・二五 徒五 ナ傳三・一六
ラ詩二二・五、五八
一一、八二・一

一三 貧くして賢き童子は 老て愚にして諫を納れざる王に愈る 彼は牢獄より出て王となれり 然どその國に
一四 生れし時は貧かりき 我日の下にあゆむところの群生が彼王に續てこれに代りて立ところの童子とともにある
一五 を觀たり 民はすべて際限なしその前にありし者みな然り 後にきたる者また彼を悦ばず是も空にして風を
一六 捕ふるがごとし

第五章

一 汝エホバの室にいたる時にはその足を慎め進みよりて聽聞は愚なる者の犠牲にまさる 彼等は
二 その惡をおこなひをることを知ざるなり 汝神の前にありては輕々しく口を開くなかれ 心を攝
三 めて妄に言をいだすなかれ 其は神は天にいまし汝は地にをればなり 然ば汝の言詞を少からしめよ 夫夢は事
四 の繁多によりて生じ 愚なる者の聲は言の衆多によりて識るなり 汝神に誓願をかけたば之を還すことを怠る
五 なかれ 神は愚なる者を悦びたまはざるなり 汝はそのかけし誓願を還すべし 誓願をかけてこれを還さざる
六 よりは寧ろ誓願をかけざるは汝に善し 汝の口をもて汝の身に罪を犯さしむるなかれ 亦使者の前に其は過誤
七 なりといふべからず 恐くは神汝の言を怒り汝の手の所爲を滅したまはん 夫夢多ければ空なる事多し 言詞の
八 多きもまた然り 汝エホバを畏め

八 汝國の中に貧き者を虐遇る事および公道と公義を枉ることあるを見るもその事あるを怪むなかれ 其は
九 その位高き人よりも高き者ありてその人を伺へばなり 又其等よりも高き者あるなり 國の利益は全く是にあり
一〇 即ち王者が農事に勤むるにあるなり

一〇 銀を好む者は銀に飽こと無し 豊富ならんことを好む者は得るところ有らず 是また空なり 貨財増せば

ヲ王下九・三五 賽 ヲ伯三・一六 詩五八 ヲ伯九・三二 賽四五 ○九・三三、一四四・ソ鐵二五・三〇、二二二 木詩一四一・五 鐵 ナ詩一八・二二 傳 一九
一四・二九、二〇 耶 八 傳四・三 九 耶四九・一九 四 雅四・一四 一三・一八、一五 二・二二
三二・一九 カ鐵一六・二六 夕詩一〇二・二一、一レ 詩三九・六 傳八・七 ツ 哥後七・一〇 三一、三二 三 出三三・八 申一六

また長壽してその年齢の日多からんも若その心景福に満足せざるか又は葬らるゝことを得ざるあれば我言ふ
流産の子はその人にまさるなり 夫流産の子はその來ること空しくして黑暗の中に去ゆきその名は黑暗の中に
かくるゝなり 又是は日を見ることなく物を知ることなければ彼よりも安泰なり 人の壽命千年に倍するとも
福祉を蒙れるにはあらず皆一所に往くにあらずや

人の勞苦は皆その口のためなりその心はなほも飽ざるところ有り 賢者なんぞ愚者に勝るところ
あらんや また世人の前に歩行ことを知ところの貧者も何の勝るところ有んや 目に觀る事物は心のさまよひ
歩くに愈るなり 是また空にして風を捕ふるがごとし

嘗て在し者は久しき前にすでにその名を命られたり 即ち是は人なりと知る 然ば是はかの自己よりも力
強き者と争ふことを得ざるなり 衆多の言論ありて虚浮き事を増す然ど人に何の益あらんや 人はその虚空
き生命の日を影のごとくに送るなり 誰かこの世において如何なる事か人のために善き者なるやを知らん 誰かその
身の後に日の下にあらんところの事を人に告うる者あらんや

第七章

名は美膏に愈り 死る日は生るゝ日に愈る 哀傷の家に入は宴樂の家にいるに愈る 其は一切の
人の終かくのごとくなればなり 生る者またこれをその心にとむるあらん 悲哀は嬉笑に愈る 其
は面に憂色を帯るなれば心も善にむかへばなり 賢き者の心は哀傷の家にあり 愚なる者の心は喜樂の家にあり
賢き者の勸責を聽は愚なる者の歌詠を聽に愈るなり 愚なる者の笑は釜の下に焚る荆棘の聲のごとし
是また空なり 賢き人も虐待る事によりて狂するに至るあり 賄賂は人の心を壞なふ

九八 事の終はその始よりも善し 容忍心ある者は傲慢心ある者に勝る 汝氣を急くして怒るなかれ 怒は愚なる者の胸にやどるなり 昔の今にまさるは何故ぞやと汝言なかれ 汝の斯る問をなすは是智慧よりいづる者に

あらざるなり

二二 智慧の上に財産をかぬれば善し 然れば日を見る者等に利益おほかるべし 智慧も身の護庇となり 銀子

も身の護庇となる 然ど智慧はまたこれを有る者に生命を保しむ 是知識の殊勝たる所なり 汝神の作爲を

二四 考ふべし 神の曲たまひし者は誰かこれを直くすることを得ん 幸福ある日には樂め 禍患ある日には考へよ

神はこの二者をあひ交錯て降したまふ 是は人をしてその後の事を知ることなからしめんためなり

二五 我この空の世にありて各様の事を見たり 義人の義をおこなひて亡ぶるあり 惡人の惡をおこなひて

二六 長壽あり 汝義に過るなかれまた賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

二七 また愚なる勿れ 汝なんぞ時いたらざるに死べけんや 汝此を執は善しまた彼にも手を放すなかれ 神を畏む

二八 者はこの一切の者の中より逃れ出るなり

一九 智慧の智者を幫くることは邑の豪雄者十人にまさるなり 正義して善をおこなひ罪を犯すことなき人は

二〇 世にあることなし 人の言出す言詞には凡て心をとむる勿れ 恐くは汝の僕の汝を誣ふを聞ともあらん

二一 汝も屢人を誣ふことあるは汝の心に知ところなり

二三 我智慧をもてこの一切の事を試み我は智者とならんと謂たりしが遠くおよばざるなり 事物の理は遠く

二四 して甚だ深し 誰かこれを究むることを得ん 我は身をめぐらし心をもちひて物を知り事を探り 智慧と道理を

イ 傳一四・二九 八傳一・一七 六申二八・四七 傳三 卜 傳二五・一六 五五・二三 傳一〇 五傳九・一六、一八 羅三・二三 約壹一 ワ 伯二八・一一、二〇
 口 傳一四・二七、一六 二伯一・二四 傳一 四 チ 羅一・二三 二七 ル 王上八・四六 代下 八 提前六・一六
 三二 雅一・一九 二五 賽一四・二七 八傳八・一四 一 伯一五・三三 詩 又 傳二・二二、二四 六・三六 傳二〇・九 一 羅一・三三 方 羅一・三三

二三 罪を犯す者百次悪をなして猶長命あれども 我知る神を畏みてその前に畏怖をいだく者には幸福あるべし
 二三 但し悪人には幸福あらず またその生命も長からずして影のごとし 其は神の前に畏怖をいだくことなければなり

一四 我日の下に空なる事のおこなはるゝを見たり 即ち義人にして悪人の遭べき所に遭ふ者あり 悪人にして義人の遭べきところに遭ふ者あり 我謂り是もまた空なり 是に於て我喜樂を讚む 其は食飲して樂むよりも好き事は日の下にあらざればなり 人の勞して得る物の中是こそはその日の下にて神にたまはる生命の日の間 その身に離れざる者なれ

一六 茲に我心をつくして智慧を知らんとし世に爲ところの事を究めんとしたり 人は夜も晝もその目をとちて眠ることをせざるなり 我神の諸の作爲を見しが人は日の下におこなはるゝところの事を究むるあたはざるなり 人これを究めんと勞するもこれを究むることを得ず 且又智者ありてこれを知ると思ふもこれを究むることあたはざるなり

第九章

一 我はこの一切の事に心を用ひてこの一切の事を明めんとせり 即ち義き者と賢き者およびかれらの爲ところは神の手にあるなるを明めんとせり 愛むや惡むやは人これを知ることなし 一切の事はその前にあるなり

二 諸の人に臨む所は皆同じ 義き者にも惡き者にも善者にも 淨者にも穢れたる者にも 犠牲を献ぐる者にも 犠牲を献げぬ者にもその臨むところの事は同一なり 善人も罪人に異ならず 誓をなす者も誓をなすことを畏るゝ

イ賽六五・二〇 羅二 一九 箴一・三三、四一 九・一一三 九・七七 九・一二、一三 馬
 五・五 三三・賽三・一〇、八 詩七三・一四 傳二 二傳二・二四、三・一 本伯五・九 傳三・一一 卜傳八・一四 三・一五
 口詩三七・一一、一八、 一一 太二五・三四、 二四、七・一五、 二、二二、五・一八、 羅二・一三三 詩七三 三・一五

一四一・二一 賽 二六・二四 三・三三三・五・ 一四・一五 二〇・三九・一七 二二
 六三・二六 八傳八・二五 一八 九傳八・七 二六
 又伯七・八一・一〇 賽 七傳二・二〇、二四、 七耶九・三三 二・ 三傳二九・六 路二二 夕母後二〇・一六一

三 者に異ならず 諸の人に臨むところの事の同一なるは是日の下におこなはるゝ事の中の悪き者たり 抑人の心

四 には悪き事充をりその生る間は心に狂妄を懐くあり 後には死者の中に往くなり 凡活る者の中に列る者は望

五 あり 其は生る犬は死る獅子に愈ればなり 生者はその死んことを知る 然ど死る者は何事をも知すまた應報を

六 うくることも重てあらずその記憶らるゝ事も遂に忘れらるゝに至る 又またその愛も悪も嫉も既に消うせ

て彼等は日の下におこなはるゝ事に最早何時までも關係ことあらざるなり

七 汝往て喜びをもて汝のパンを食ひ樂き心をもて汝の酒を飲め 其は神久しく汝の行爲を嘉納たまへばなり

八 汝の衣服を常に白からしめよ 汝の頭に膏を絶しむるなかれ 日の下に汝が賜はるこの汝の空なる生命の日

九 の間 汝その愛する妻とともに喜びて度生せ 汝の空なる生命の日の間しかせよ 是は汝が世にありて受る分汝が

〇 日の下に働ける勞苦によりて得る者なり 凡て汝の手に堪ることは力をつくしてこれを爲せ 其は汝の往んと

一 ころの陰府には工作も計謀も知識も智慧もあることなければなり

二 我また身をめぐらして日の下を觀るに 迅速者走ることに勝にあらず 強者戦争に勝にあらず 智慧者食物を

獲にあらず 明哲人財寶を得にあらず 知識人恩顧を得にあらず 凡て人に臨むところの事は時ある者偶然なる者

三 なり 人はまたその時を知らず 魚の禍の網にかゝり鳥の鳥羅にかゝるが如くに世の人にもまた禍患の時の計らざ

るに臨むに及びてその禍患にかゝるなり

四 我日の下には是事を觀て智慧となし大なる事となせり 又またはち茲に一箇の小き邑ありてその中の人は

鮮かりしが大なる王これに攻きたりてこれを圍みこれに向ひて大なる雲梯を建たり 時に邑の中に一人の智慧

ソ詩一〇四・一五 本齊三三・二〇 四二 野後九・八 ラ詩一一二・九 路六 ム米五・五
ツ出三二・二八 徒 ナ申一五・一〇 加六・九、一〇 來 三〇 提前六・一 ウ弗五・一六
二二・五 九・一七 本一〇・ 六・二〇 八、一九 半約三・八 才傳七・二一 六、一一
ノ詩一三九・一四、一 ク民一五・三九 十傳一二・二四 羅二 マ野後七・一 提後二
ケ詩三九・五

一六 一七 一八 一九 二〇
その王は童子にしてその侯伯は朝に食をなす國よ 汝は禍なるかな 一七 一八 其の王は貴族の子またその侯伯
は醉樂むためならず力を補ふために適宜き時に食をなす國よ 汝は福なるかな 一八 其の王は貴族の子またその侯伯
落ち手を垂るところよりして家屋は漏る 一八 其の王は貴族の子またその侯伯
何事にも應ずるなり 二〇 汝 心の中にも王たる者を詛ふなかれ また寢室にても富者を詛ふなかれ 天空の鳥
その聲を傳へ羽翼ある者その事を布べければなり

第一章

一 二 三 四 五 六 七 八
汝の糧食を水の上に投げよ 多くの日の後に汝ふたゝび之を得ん 二 汝一箇の分を七また八にわ
かて 其は汝如何なる災害の地にあらんかを知ざればなり 三 雲もし雨の充るあれば地に注ぐまた
樹もし南か北に倒るゝあればその樹は倒れたる處にあるべし 四 風を伺ふ者は種播ことを得ず 雲を望む者は刈
ことを得ず 五 汝は風の道の如何なるを知す また孕める婦の胎にて骨の如何に生長つを知す 斯汝は萬事を爲
たまふ神の作爲を知ことなし 六 汝 朝に種を播け 夕にも手を歇るなかれ 其はその實る者は此なるか彼なるか
又は二者ともに美なるや汝これを知ざればなり 七 夫光明は快き者なり 目に日を見るは樂し 八 人多くの年
生ながらへてその中凡て幸福なるもなほ幽暗の日を憶ふべきなり 其はその數も多かるべければなり 凡て來らん
ところの事は皆空なり

九 一〇
少者よ汝の少き時に快樂をなせ 汝の少き日に汝の心を悦ばしめ 汝の心の道に歩み 汝の目に見るところを
爲せよ 但しその 諸の行爲のために神汝を鞠きたまはんと知べし 一〇 然ば汝の心より憂を去り 汝の身より惡き
者を除け 少き時と壯なる時はともに空なればなり

第二章

汝の少き日に汝の造主を記えよ 即ち悪き日の來り年のよりて我は早何も樂むところ無しと言に
いたらざる先 二 また日や光明や月や星の暗くならざる先 雨の後に雲の返らざる中に汝然せよ

その日いたる時は家を守る者は慄ひ力ある人は屈み磨碎者は寡きによりて息み窓より窺ふ者は目昏むなり

磨こなす聲低くなれば衛の門は閉づ その人は鳥の聲に起あがり 歌の女子はみな身を卑くす 五 かゝる人々は

高き者を恐る畏しき者多く途にあり 巴旦杏は花咲くまた蝗もその身に重くその嗜欲は廢る 人永遠の家にした

らんとすれば哭婦衛にゆきかふ 然る時には銀の紐は解け金の盞は碎け吊瓶は泉の側に壞れ轆轤は井の傍

に破ん 而して塵は本の如くに土に販り 靈魂はこれを賦けし神にかへるべし 傳道者云ふ空の空なるかな

皆空なり

九 また傳道者は智慧あるが故に恒に知識を民に教へたり 彼は心をもちひて 尋ね究め許多の箴言を作れり

一〇 傳道者は務めて佳美き言詞を求めたり その書するしたる者は正直して眞實の言語なり

一一 智者の言語は刺鞭のごとく 會衆の師の釘たる釘のごとくにして 一人の牧者より出し者なり 二 わが子よ

是等より訓誡をうけよ 多く書をつくれれば竟なし 多く學べば體疲る

一二 事の全體の販する所を聽べし 云く神を畏れその誠命を守れ 是は諸の人の本分たり 神は一切の行爲

ならびに一切の隠れたる事を善惡ともに審判たまふなり

傳道之書 をはり

- イ 傳三三・六 哀三・ 八 傳後一九・三五
- ハ 傳後一九・三五 二 傳一七・一三
- ロ 傳後一九・三五 六 傳九・一七
- ヘ 傳三・一九 伯三四 子民一六・二二・二七
- ニ 傳一五 詩九〇・三 一六 伯三四・一四
- ト 傳三・二二 一 傳五七・一六 又王上四・三二
- リ 詩六二・九 傳二・二
- ル 傳一・二八 ヲ 傳二・一九 太二二
- 三六 徒一七・三
- 〇 三 羅二・一
- 六 一四・一〇・一一
- 寄前四・五 寄後五